

2010年度

非文字資料研究センター 第1回公開展示および公開ワークショップ



公開展示

『関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵—』

期 間：2010年10月22日(金)～11月1日(月)
会 場：神奈川県 横浜キャンパス 常民参考室
(3号館1階)

公開ワークショップ

関東大震災の布絵づくり

日 時：2010年10月31日(日) 10:30～17:00
会 場：神奈川県 横浜キャンパス 常民参考室
(3号館1階)



1. 公開展示「関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵—」の企画

慰霊堂収蔵庫の資料調査で、萱原黄丘作「東都大震災過眼録」を見出したことはわたしたち調査班に新しい課題を突きつけました。つまり、作者はどういう人物か、震災が描かれたもののなかでこの絵巻はどのような位置を占めるものなのか、作成当時の評価はどのようなものであったのかということです。調査の結果、その家族の萱原家とコンタクトが取れ、この絵の作者はすでに亡くなられたが、夫人は存命であること（展示実施の約半年前、2010年5月6日にご逝去）、萱原家にこの絵巻と同一テーマの別の3巻の絵巻が所蔵されていることなどがわかりました。早速、その絵巻を拝見する機会をいただきました。一巻15mもある絵巻3巻に亘って描かれた、震災発生から被服廠での四十九日法要までの震災ストーリーは大変衝撃的なものでした。わたしは調査の過程で、震災の写真や版画、有名な池田遥郵「災禍の跡」の屏風絵などさまざまなものを見てまいりましたが、約4万人が焼死したという本所被服廠周辺を対象に、そこで起きたさまざまな震災の人間ドラマを庶民群像として描いたものははじめてでした。これは是非とも展示をして、

神奈川大学の学生たちをはじめ、それに一般の方々にも披露する価値があるものと考え、神奈川大学の大学祭企画の一環に加わることにしました。この絵巻は2003年に新大久保にある高麗博物館で展示されたことがあるということでしたが、展示図録などは発行されていませんでした。そのため、今回の展示の目的のひとつとして、この絵巻を紹介する図録を発行することも大きな課題でありました。いろいろな方々の協力を得て、その課題は十分に果たすことができました。

さて再び展示場に話を戻すと、慰霊堂に残る震災で被災した子どもたちの絵も、白洞の絵巻に劣らず衝撃的な体験を率直に語るものとして展示することにしました。さらに当初から企画の大きな柱として考えていたのは、震災体験を経て自分は生まれ変わった、つまり、自分の画家としての生まれ年は震災の年といって憚らなかった画家にして漫画家の柳瀬正夢（1900～1945）の作品も展示に加えることでした。この人物についてはすでに柳瀬の絵画を所蔵する武蔵野美術大学で展覧会が開催されていましたので、ここでは柳瀬やその同時代の竹久夢二など当時の漫画家について30年来関係資料を収集されて来られた片倉義夫氏のコレクションの力をお借りすることにし、また、柳瀬の評伝を執筆した作家の井出孫



六氏にご講演いただくことで柳瀬の位置づけをしていただくことになりました。

以上で、描かれた震災画、すなわち、日本画家の絵巻、子どもの震災体験画、当時の新聞・雑誌などに掲載された時事漫画の3本の柱が整いました。

また、震災写真の展示として、深代敦子氏のご好意で叔父に当たられる田村瑞穂氏（内務省、東京市の衛生課に勤務した人物）旧蔵の写真帖をご提供いただき、そのなかからあまり一般には出回っていない震災写真15点を印刷してパネル展示とさせていただきます。

本展示のメインはなんといっても、萱原白洞の3巻



写真1 展示場ケース内の新聞、雑誌に見入る観覧者



写真2 麻生豊『ノンキナトウサン』、新聞連載漫画の切り抜きなど（片倉義夫氏蔵）が展示されているケース



写真3 好評だった「東都大震災過眼録」の複写本3巻

の絵巻でしたが、長さ6メートルの展示ケースでは絵巻の半分も広げられない状態でしたので、実際の絵巻を写真に撮って印刷し、それらを張り合わせて絵巻状にした複製を会場に置き、自由に見ていただくことにしました。

*アンケートにお答えいただいて

展示期間の10月22日から11月1日まで（24日は日曜日のため休館）のうち入館者は377人、アンケートに記入していただいた方は77人でした。回答者を年齢別にみると、10代7人、20代17人、30代9人、40代6人、50代7人、70代9人、居住地では、地元の横浜が32人とほぼ半数を占め、東京8人、それ以外のところからは27人の方々にお越しいただきました。なかでも感動したのは、茨城県からは是非見たいといって84歳のお年寄りが娘さんに付き添われてお越しいただいたことでした。全般に比較的高年齢の方々に来ていただいたことは、自分自身の体験ではなくても関東大震災のことを親から聞いて育った年代の方々に来ていただけたと推測しています。

特に関心を持たれたものとしては、絵巻と子どもの絵に感動したという方がともに23人と多く、片倉義夫氏が主宰する漫画資料室MORIの所蔵する震災時の時事漫画や当時の新聞を熱心に読んでいるの方々も多く、こうした消えてしまいがちな資料をよく収集されたものと感心された方も少なくありませんでした。また、会場に設置した築地本願寺の無声の震災映画（中央区教育委員会が編集された震災ビデオ、24分間）は、何回も繰り返し見ているの方々も多く、震災の様子に限らず、当時の風俗も珍しいものであったようで、動くリアルな映像には関心が高いことがわかりました。

概ね、展示は好評を博したと感じています。ただ、説明が不足しているという声はアンケートのなかに2、3見られ、この点は反省すべきことと思いました。（この項、北原）

2. 公開研究会「関東大震災を描く—絵巻・漫画・子どもの絵—」

公開研究会は10月30日、丁度台風が近づくという情報もあり学園祭は中止とされるなか、公開研究会はすでに学外の方々に周知されていると判断、決行することになりました。この悪条件にもかかわらず、関係者を含め55人という参会者のなか開催されました。第1部は非文字資料研究センターの研究担当者による報告2件、午後は、井出孫六、片倉義夫、新井勝紘、及部克人の四

氏による講演が行われました。しかしながら、電車も間引き運転が始まるという状況であったため、講演後に予定したディスカッションは打ち切りとなりました。こうした状況にもかかわらず、別棟の展示場では熱心な観覧者も多く見られました。

【第Ⅰ部】

報告① 高野 宏康 (非文字資料研究センター研究協力者)



「震災絵巻『発見』の経緯と
東京都慰霊堂収蔵庫の資料」

当日は、折からの台風により開催が危ぶまれたが、タイムテーブルを若干変更して開始することになった。まず、今回の公開展示と公開研究会を開催するきっかけとなった、東京都慰霊堂の資料調査と震災絵巻「発見」の経緯について、調査担当者の一人である高野が報告を行った。関東大震災の慰霊施設である東京都慰霊堂には、約数千点の資料が保管されている。これらは、もともと各種の震災関連展覧会の出品物や、一般市民から寄贈されたもので、いわば自然に集まった資料という性格をもっており、戦時期に同館が接収され病院となった際に慰霊堂に移されたものである。

2006年度の神奈川大学21世紀COEプログラムでの写真資料調査、2008年度からの非文字資料研究センターおよび、朝日新聞文化財団の文化財保護助成事業を受けての関東大震災資料調査会による調査まで、学術調査は行われていなかった。2008年度の調査時に震災絵巻が「発見」されたが、当初は作者が不明であった。その後、萱原白洞（慰霊堂の絵巻執筆時の雅号は黄丘）の作であることが判明、他にも絵巻・画帖が存在することがわかり、今回の展示開催につながるようになった。これまでの調査成果としては、資料リストの作成、絵画20点と図表類60点のデジタル化、震災特集雑誌43点と復興記念館の文献資料67点のマイクロフィルム化を行ったこと等である。現在、公開に向けて準備中であり、今後、これらの資料を関東大震災の総合的な研究に活用していく必要があることを指摘した。

報告② 北原 糸子 (非文字資料研究センター研究員)



「萱原白洞の『東都大震災過眼録』について」

今回の主要な展示物の一つである震災絵巻「東都大震災過眼録」の作者、萱原白洞（1896～1951）は、当

時27歳、画家の山内多門のもとで修業中に、東京の淀橋町（現在の新宿）で震災に遭遇した。震災後まもなく、白洞は千葉県の土気にもって震災絵巻を描き続け、1923年12月に3巻を完成させた。その内容は、震災の発生から四十九日法要までの約1ヶ月半を描いたものである。

第一巻では、震災発生から約4万人が死亡した被服廠跡で火災旋風に見舞われた人びとが逃げ惑う様子を描き、第二巻では、冒頭に焼き崩れた永代橋を渡りかけたのが落下し、溺死・焼死する場面、続いて戒厳令がしかれ軍隊が出動した、治安維持と救助活動を描いている。第三巻では、震災直後の混乱が収束に向かい、避難者が家族を捜し回る場面や、うどん屋の屋台、露天学級の様子が描かれ、最後は被服廠での四十九日法要で絵巻が終了している。その後も白洞は繰り返し同様の主題で絵巻を描いており、現在までに絵巻5巻と画帖2冊が確認されている。

この絵巻を通じて特徴的なことは、白洞が震災に遭遇した庶民に焦点を当て、その動きを追うことに徹している点である。描かれた場面は、本所の被服廠跡周辺に視点をあてられ、震災の写真や絵画でよく見られるような著名な建物などは永代橋を除いてほとんど登場しない。時期は、震災発生から約1ヶ月半の出来事に集中している。また、重要なのは、朝鮮人への集団暴行もしくは虐殺の場面が描かれていることである。これらの場面を繰り返し少しずつ異なる表現で描いており、白洞が震災に強く執着していたことがうかがえる。

白洞が震災に遭遇したのは寄宿先であった山内多門邸であると推定されるが、淀橋町は火災を免れたため、他町村や町内からの避難民であふれていた。多門の弟子たちも避難者の大群の救援活動にあたっていたと推定され、その体験が震災絵巻となって表現されたと思われる。震災絵巻全3巻は、師である多門のもとに50年間以上保管され、1982年の多門50回忌の際に遺族に返却されて、現在に至っている。

【第Ⅱ部】

講演① 井出 孫六 (作家)



「権の画家 柳瀬正夢」

第Ⅱ部では、今回の公開展示に関連する4つの講演が行われた。まず、震災後、漫画を描くことが中心とな



った画家の柳瀬正夢について、評伝『ねじ釘の如く 一画家・柳瀬正夢の軌跡一』（1996）の執筆者である、作家の井出孫六氏が講演を行った。震災前の1923年7月、柳瀬はマヴォ第1回展のメ切直前、「潜む暴力」の裏面に「五月の朝と朝飯前の私」を描きあげた。柳瀬の最後の油絵で、のちに代表作とされるようになった同作品は、ビルの窓から赤い火が見え、大地がぐるぐる廻り、ビルがぐらぐら揺れているような不安な構図で、井出氏は、奇しくも震災後の新宿の街を暗示しているようだと言われた。

マヴォ第1回展が終了して1ヶ月もたない9月1日、震災が起こった。柳瀬は、大山郁夫邸にいたが、翌日、憲兵隊がふみこんできて大山は検束されてしまう。柳瀬もまた、3日には兵士に踏み込まれて街頭に引き出され、留置場に入れられた。途中、「殺しちまえ」と罵口で叩かれ、棒で足を払われるなど、「潜む暴力」が余震から姿を現したかのようであった。その後、柳瀬は父の住む門司港に避難し、10月の初め、まだ戒厳令が解除されない東京に、救援物資を担いで戻った。焼け跡を見て廻り描き続けたスケッチブックには、柳瀬の新たな出発の意思が示されていた。

柳瀬は、正力松太郎が読売新聞を買収したことを契機として、同社を退社し、おもに本の装幀で糊口をしのぐ道を選び、『種蒔く人』の仲間を中心に発足した『文芸戦線』の同人に名を連ね、プロレタリア文芸連盟美術部で活動するようになる。『無産者新聞』には1926年3月から柳瀬の漫画が掲載されるようになるなど、昭和初期には日本を代表する左翼漫画家となった。数年後、柳瀬は早くも自叙伝を綴っているが、その中で、自分は1923年9月1日、すなわち関東大震災の焦土の中で生まれたと書いており、井出氏は震災が柳瀬に与えた影響が決定的なものであったことを物語っていると述べられた。



講演② 片倉 義夫 (漫画資料室 MORI 主宰)

「画家・漫画家のみた関東大震災
—竹久夢二・麻生豊・宮武外骨」

今回展示された震災当時の雑誌・新聞類のほとんどは、片倉氏が主宰する漫画資料室 MORI の収蔵資料から借用したものである。片倉氏は、それらを中心に画家や漫画家がみた関東大震災について講演を行った。震災後、多くの新聞・雑誌が大震災特集を組み、各種の大震災画

集も発刊されたが、これらに掲載された絵画や漫画から、多くの画家・漫画家が、流言飛語や逮捕、虐殺を批判していたことがわかる。ここでは、画家・漫画家の竹久夢二と麻生豊、ジャーナリストの宮武外骨の作品が紹介された。

竹久夢二は、『都新聞』に21回（1923年9月14日号～10月4日号）、「東京災難画信」という作品を連載した。その一つ、「自警団遊び」（連載6）では、一人の子供を朝鮮人にみたと、竹槍で追いかけて遊ぶ姿が描かれている。夢二は、子供達に自警団ごっこをするのは止めようと呼びかけ、そのような風潮を憂いている。また、「ポスター」（連載15）では、「有りもせぬ事を言い觸らすと處罰されます 警視廳」と書いた貼り紙が描かれており、夢二の批判が込められていることがわかる。

麻生豊は、震災以前から『報知新聞』の日曜漫画に「呑気な父さん」を連載していたが、1923年10月28日（連載17回目）以降、震災後の世相を毎日描き始めた。「トウサン」と隣の大將が失業を繰り返しながらも震災後の厳しい社会を飄々と生きていく姿が共感を呼び、長期にわたって人気を博した。連載21回目の作品では、朝鮮人虐殺を暗示させる内容となっているが、印刷物でこれだけ表現した作品は例がない。

宮武外骨は、火災が収まった9月4日から被災地取材し、『震災画報』（全6冊）として発行した。外骨は、自ら大杉栄と伊藤野枝を思わせる図版を添えた文章を寄せ、流言蜚語や虐殺に対して憤りを表現しているほか、日本漫画会のメンバーの作品（「福興焼」『国民新聞』前川千帆など）を各新聞から転載し、庶民の生き抜く強さ、したたかさを伝えている。最後に、片倉氏は自身の漫画蒐集の背景には、画家たちが作品を通じて伝えようとしたメッセージを若い人たちに受け継いでいってもらいたい、そのための資料室でもあると述べられた。



講演③ 新井 勝紘 (専修大学教授)

「子どものみた関東大震災—子どもや画家の描いた絵画から何を讀みとるか—」

新井氏は、東京都慰霊堂に多数保管されている小学生が描いた震災体験の絵の分析から、朝鮮人虐殺が当時の子どもたちにどのように受け止められていたのかを中心に話された。

本所区にある本横小学校の生徒の絵画は、『大正震災

記念畫帳』としてまとまっているが、これは図工の教員であった高田力蔵の指導により、アメリカからの救援物資として届けられた色鉛筆・絵の具・クレヨンを用いて描かれたものである。そのなかに松山達夫（4年生）の二部作がある。歩行中の一人が呼び止められ、警察官と鉄砲を担いだ人物が、朝鮮人であるかどうかを見極めるために、道行く人々を検問している場面が描かれている。また、山崎巖（4年生）は、多くの民衆と軍人、自衛団員と思われる人物が、一人の朝鮮人らしき人物を芋畑に追い詰めている姿をリアルに描いている。場所は現千葉県市川市中山と推測されるが、当時、中山では16人の朝鮮人が虐殺された事実が確認されており、その場面を描いたものと思われる。

また、挿絵画家・河目悌二の水彩画には朝鮮人虐殺が詳細に描かれているが、これまで一度も公表されていないとして、特にこの絵をカラーで紹介された（国立歴史民俗博物館所蔵）。新井氏はこの絵画が描かれた状況の検証は必要だが、現場を目撃した河目が歴史的な出来事として刻印しておく必要があることを強く意識したのではないかと指摘された。

今回、展示されている震災絵巻の作者、萱原白洞も、朝鮮人へ暴行を加える場面を描いている。白洞は、千葉県の土気にもって絵巻を何本も描き続けた。その他にも、絵巻で関東大震災を描いたものとして、豎山南風の震災絵巻や、「関東大震災絵巻」（作者不明、歴史民俗博物館所蔵）があり、様々な情報を読み取ることができる。最後に新井氏は、これまでの文字・文献資料に偏りすぎた研究を反省し、非文字資料の分析に積極的に取り組んでいく必要があることを指摘された。



講演④ 及部 克人 (武蔵野美術大学名誉教授)

「阪神・淡路大震災共同布絵づくり」

及部氏は「もうひとつの公共デザイン」の関心から自ら参加された、1995年の阪神・淡路大震災後の神戸市長田区真野地区の住民組織の活動とコミュニティの復旧・復興の取り組みの体験から生まれた「布絵づくり」について話された。「もうひとつの公共デザイン」とは、自治体、企業などの上からのデザインではなく、それらを受け取る側の市民の立場からの公共デザインを意味するものだという。被災者と東京の美大生や京都・大阪のボランティアの共同作業によって、震災体験を布絵で表

現するというものであったが、その成果物である布絵を会場で掲げつつ、企画の意図について解説された。今回の公開展示では、真野地区で作られた作品を2点展示しているほか、関東大震災を描いたさまざまな展示品をみて感じたことを、実際に布絵で表現するワークショップを開催することに大きな意味があるとされた。体験してはじめて納得する企画であるため、当時の布絵作成過程について映像記録を上映しつつ説明された。

真野地区は、1965年以来公害反対運動から40年以上の歩みを持ち、震災当時は、いちやくバケツリレーで火事に立ち向かい、43戸ほどの消失で延焼を食い止めるなど、震災復興を支える住民の積極的な活動を行ったことで全国にその名を知られている。震災後の1995年4月、真野の復興にたずさわる現地の人びとからの誘いを受け、布絵づくりが行われることになったという。布絵を作ることが目的なのではなく、そのプロセスを通じて、人々が語り合い、気持ちが通じ合うことに意味がある。また布に触発されて、個性や年齢が異なる複数の人びとが一緒に絵を作ることに布絵づくりの意義があることを強調された。

今回は、関東大震災について描かれたさまざまな展示品から感じたことを布絵で表現することで、震災の被害や復興、描いた人の意図をより理解することができるのではないかと指摘し、ワークショップへの参加を呼びかけて、講演を終えた。

及部氏の講演のあと、台風接近のため、残念ながらディスカッションは中止となりました。このことは心残りではありましたが、今回の公開研究会で、絵巻、絵画、漫画、挿絵といったさまざまなかたちで描かれた関東大震災像について講師それぞれの見方が明らかにされ、また、東京都慰霊堂の調査および、萱原白洞の震災絵巻について紹介する機会が得られたことは意義深いことでし



写真4 公開研究会の様子



た。(この項、高野)

3. 阪神大震災の布絵の展示と、関東大震災布絵づくりワークショップ

3-1 阪神大震災の布絵の展示

さて、この展示では、さらにもうひとつ重要なことを企てました。それは、阪神大震災を体験した人々による布絵を展示したことです。この布絵は展示場に飾りはしませんが、この布絵を見るということに主眼があるのではなく、これを参考に震災絵画展を見た方々にそこで感じたものを布絵に表現してもらうための参考作品として展示しました。そのため、公開研究会を開催した翌日の10月31日に一日かけて布絵づくりのワークショップを持ちました。このワークショップの成果はこのニューズレターの表紙を飾る2つの布絵となりました。

このことについて多少説明をいたします。わたしたちは美術の専門家ではありませんので、震災画を展示するという目的は美術としての絵画をみてもらうというつもりはありませんでした。関東大震災とはどういうものであったのかを絵をみて考え、こうした過酷な体験をした横浜という都市に住む者として、震災体験を想像してもらうための材料を提供しようというものでした。それも学園祭の一環として企画した意図は、若い学生諸君に関東大震災についてじっくり考えてもらうための機会を作ろうということでした。また、単に考えてもらうだけでなく、展示場で感じたものを布絵という形で表現してもらい、一種の擬似体験を通して過酷な体験をした人々が何を頼りにそれを乗り越えようとしたのかを想像する機会をともに持とうというものでした。

これは実際に作られた布絵の経過を説明することでしか説明できません。以下はこの布絵づくりに参加された人たちの体験談から経過がある程度わかるようにピックアップしたものです。



写真5 「阪神・淡路大震災共同布絵づくり」で作成された布絵

3-2 関東大震災布絵づくりワークショップ

10月30日のシンポジウムは台風の影響で昼休みを短縮し1時間繰り上げ、さらに最後の講演者の及部克人氏のお話は20分で済ませていただき、翌31日のワークショップへ引き継ぐことで了解いただきました。

31日には台風は過ぎ去り天候も青空がすこし顔を出した程度でしたが、学園祭は1日だけの開催となったものの多くの人たちが訪れ、大変な賑わいとなりました。その余波であり学生たちが関心を示さない「関東大震災」ですが、77人の入場者がありました。そのなかからワークショップへの参加者も得られ、12人が集まりました。及部克人先生の指導で、この12人が仲間となって布絵づくりに挑戦。このようなワークショップでは、素材の準備やプログラムの進行を支える助言者を“ファシリテーター”と呼ぶのだそうです。今回のワークショップでは、経験豊富な讃井さん、加藤さん、佐藤さんの3人がこの役割を担ってくださった。ほかの人たちははじめて集まったメンバーなので、お互いをよく知らないもの同士でしたが、この仕事は参加者たちがお互いに多少気の許す関係を作らないと、そうそう簡単に共同の作業はできません。及部先生の指示されるままに動作をしていくと、自然と知らない間同士でのこの場での関係が出来上がるように感じられました。

ウォーミング・アップ

- 1) まず、みんなで輪になる。隣の人と手を繋ぐ。次に隣同士が足、肩、頭などどこか一箇所に触れる。それを異なる場所で2、3回やってみる。触る場所が限られるから、苦しい格好、面白い格好になる。笑いが起きる。
- 2) 6人1組になって輪を作る。目をつぶって手を前に差し出す。触れ合う手を握り、絡み合う手を放さずに繋いだまま、元の輪になるようにほぐしていく。これが難しい。結局ほぐして元に戻る場合といくら



写真6 ウォーミングアップその1